

知的障害児の家庭における余暇活動レパートリーの拡大

小出 涼太

I 問題と目的

障害児にとって充実した余暇を過ごすことは、生活の質（QOL）を向上させるために欠かすことのできない要素の1つである。しかし、障害児の余暇活動のレパートリーでは、屋内での映像鑑賞やテレビゲームといった制限が認められる（細谷,2011：丸山,2011：武藏・水内,2009：鈴木・細谷,2016：武田・我妻,2006：由谷・渡部,2007）。余暇活動を行う上で本人に関わる要因として、知的障害の程度、性別、生活年齢、コミュニケーションレベルなどが考えられる。また、支援者となる養育者に関わる要因も余暇活動レパートリーを左右すると考えられる。家庭における子どもの余暇活動レパートリーの実態とそれに関わる本人及び養育者の要因の関連について調査することによって、知的障害児の余暇活動レパートリーの拡大に向けた資料が得られると考えられる。

本研究では、放課後等支援サービス事業を運営する事業者や施設を利用する知的障害児の養育者を対象に、家庭における余暇活動レパートリーの実態調査を行い、それに関わる障害児本人と養育者に関わる要因を明らかにすることを目的とした。

II 方法

1 質問紙の作成

余暇活動の実態を明らかにするために、家庭内の余暇活動の項目を6カテゴリに分け、18項目作成した。同様に、地域の余暇活動の項目を4カテゴリ16項目作成した。各項目の内容を表1と表2に示した。各項目への回答方法として、活動の頻度を測定するために、「よくする」～「まったくしない」の5件法を用いた。また、余暇活動レパートリーに関連する子どもの要因、生活年齢、知的障害の程度について、フェイスシートで回答を求めた。養育者に関わる要因には、「時間的余裕」「経済的余裕」「レジャー・娯楽への意識」「余暇活動への関心」について、30項目を設定し、「あてはまる」～「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

表1 家庭内の余暇活動

カテゴリ	内容
映像鑑賞	テレビ DVD Youtube
紙媒体での鑑賞	絵本、マンガ 新聞・雑誌 折り込みチラシ・通販などの広告 写真集・図鑑
音楽鑑賞	iPodなどのミュージックプレイヤー CDコンボ ラジオ
テレビゲーム	Wiiやプレイステーション 任天堂3DSやスマートフォンアプリ
遊具・玩具遊び	プラレールや人形などの玩具 トランプやオセロなどのテーブルゲーム トランポリンなどの遊具
その他	かくれんぼやままごとなどのごっこ遊び 絵や文字をかく 目の前で手をひらひらさせるなどの感覚遊び

表2 地域の余暇活動

カテゴリ	内容
日常的活動	外食をする 買い物へ行く ドライブをする
レジャーの活動	登山・ハイキングをする 旅行へ行く 遊園地などのテーマパークへ行く
運動的活動	散歩をする 公園で遊ぶ プールへ行く サッカーやバスケットボールなどの球技をする スペシャルオリンピックスなどの団体活動に参加する
文化的活動	ボウリングやカラオケに行く 地域の図書館へ行く 文化的活動のレクリエーション・教室などに行く ボランティア活動に参加する 学童保育や放課後デイサービスなどの福祉サービスを利用する

2 調査対象

大学研究センターの教育相談を利用する養育者4名と大学大学院に在籍し、子どもをもつ大学院生5名の協力を得て、予備調査を実施した。その結果より、質問項目の修正を行った。

本調査を実施するに当たり、新潟県上越地域にて放課後等支援サービス事業を運営する4つの障害者関連団体や施設を利用する養育者50名にアンケート用紙を配布した。

3 倫理的配慮

学内の研究倫理審査委員会の承認を得た(2016-56)。調査対象である養育者が利用する団体

や施設の所属長に対し、研究承諾を得てから、対象者にアンケートの配布と回収を行った。

III 結果及び考察

アンケートの承諾を得た放課後等支援サービスを利用する知的障害・自閉症児者の家族を対象に本調査を実施し、41名からの回答を得た。回収率は、50名中41名(82%)であった。

1 家庭内の余暇活動の実態

家庭内の余暇活動の実態から「よくする」余暇活動として最も多かったものは、映像鑑賞であった。第一に「映像鑑賞」に関して、先行研究では、「テレビ」「DVD」が同一の選択肢として設定されており、「よくする」の回答が8~9割であった。本研究においては、「映像鑑賞」を「テレビ番組を視聴する」「DVDを視聴する」「Youtubeなどのインターネット動画を視聴する」の3つの項目を設定した。このように「映像鑑賞」について細かく項目を設定した結果、回答が分散し、「テレビ」が約7割、「DVD」が約6割と低くなった。

第二に「テレビゲーム」に関して、先行研究では「テレビゲームをする」というように1つの項目として扱われていた。本研究においては、テレビモニターを必要とする「Wiiやプレイステーションなどのテレビゲームをする」、「3DSやスマートフォンアプリなどの携帯型ゲーム」などとし、項目を細分化した。その結果、「Wiiやプレイステーションなどのテレビゲームをする」のようにテレビモニターを必要とするゲーム機での余暇活動は、「よくする」「ときどきする」を合わせると3割程度であった。一方で、ゲーム機本体さえあればどこでも遊べる携帯型ゲームでの余暇活動は、「よくする」「ときどきする」を合わせると4割程度であった。「テレビゲーム」は、スマートフォンが急速に普及し、スマートフォンアプリが携帯型ゲームとして扱われていた。知的障害児の余暇活動でも、子どもの置かれている社会や文化的な背景、生活環境が影響すると推測される。「携帯型ゲーム」「テレビゲーム」は、子ども自身が操作して遊ぶことから、映像鑑賞に比べて、より能動的な活動として位置づけられる。ただし、ゲーム操作の難しさがあり、レパー

トリーとなるためには、子どもの知的障害の程度や理解力が必要となる。

一人で行える、または集中できる余暇活動は、「よくする」「ときどきする」が多かったが、他者との交流といった余暇活動は、「ほとんどしない」が多くを占めていた。養育者の自由記述からも保護者の多忙感や一緒に遊びたくても遊ぶことが難しい問題があることが伺うことができた。家庭内の余暇活動を増やすには、他者と交流できるツールの提供や工夫が必要になると考えられる。

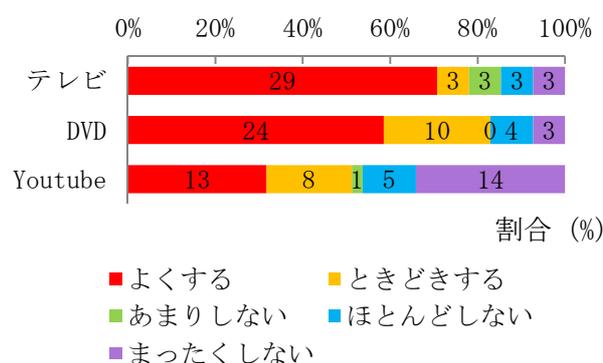


図 1 映像鑑賞

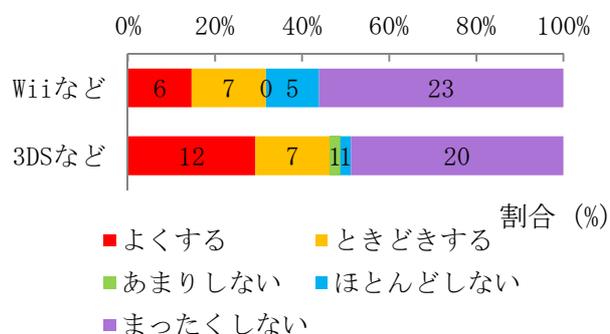


図 2 テレビゲーム

2 地域の余暇活動の実態

地域での余暇活動で「よくする」が選択肢として選ばれていた活動は、「日常的活動」であった。「日常的活動」として設定した項目は、「外食」「買い物」「ドライブ」であった。また、「日常的活動」の中で「よくする」が多かったものは順に「ドライブ」「買い物」「外食」であった。これらの結果は、先行研究で明らかにされていた最も行われている余暇活動と類似していた。これらの活動は、子どもの興味関心が強い側面もあるが、養育者の日常生活に即した活動であると考えられる。また、知的障害の程度や障

害の種類を問わずに、行い得る余暇活動であることが、「よくする」と選ばれた理由の一つであると考えられる。

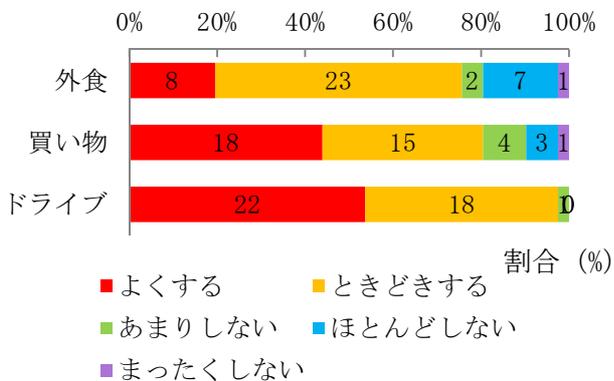


図 3 日常的活動

「運動的活動」には 5 項目を設定したが、項目ごとに先行研究とは異なる結果が得られた。先行研究では、余暇活動全体を捉えるために家庭内と地域での余暇活動でジャンル分けは行っていなかったが、「散歩をする」「公園で遊ぶ」の 2 項目は、「よくする」余暇活動の 1 つとして挙げられていた。しかし、本研究の結果から得られたのは、「よくする」よりも「ときどきする」という回答が多かった。先行研究との違いは、調査対象時期や質問項目の設定によるものと考えられる。また、細谷 (2011) や由谷・渡部 (2007) は、長期休業中の子どもの余暇活動に視点を置いた調査を行い、「散歩」「公園で遊ぶ」の活動が有意に多いと述べられていた。これらの余暇活動は、子どものみで行うには養育者が不安であり、子どものみ実施は難しい。養育者の日常的活動とは同時に実施することが困難で、養育者の余暇時間が確保されていなければ難しいと考えられる。

地域での余暇活動として頻度が多かったレポートリーに「日常的活動」があった。「日常的活動」として定めた「ドライブ」「買い物」「外食」は、「よくする」の回答が、「ドライブ」約 5 割、「買い物」約 4 割、「外食」約 2 割と金銭をあまり消費せずに行うことが出来る余暇活動の方が、「よくする」と回答されていた。この結果から家庭内の余暇活動と同様に地域の余暇活動も複数のレポートリーがあることを示している。「旅行へ行く」「遊園地などのアミューズメントパークへ行く」「散歩をする」「公園で遊ぶ」

「プールへ行く」「ボウリングへ行く」といった余暇活動も「ときどきする」と回答されていた。

以上の結果より、知的障害児の余暇活動は、決まった余暇活動だけではなく、複数のレポートリーを有していることが示された。子ども 1 人でできる余暇活動と養育者の支援を必要とする余暇活動のレポートリーがあった。

3 養育者の実態

養育者の要因に関連が考えられる項目を「時間的余裕」「経済的余裕」「レジャー・娯楽への意識」「余暇活動への関心」の 4 カテゴリに分類した。「時間的余裕」について、「あてはまらない」の回答が多かった。しかし、「休暇は十分にある」「自分の自由になる時間がある」「家族で好きな時に休暇が取れる」について「あてはまる」と「休みが不規則である」「定期的に残業している」「土日祝日は休みが取れない」の「あてはまらない」とでは、同じ意味となっている。養育者は、土日祝日は暦通りに休むことができ、仕事も残業なく過ごすことができている。一方で、「休暇は十分にある」と感じる養育者は、圧倒的に「あてはまる」が少なく半数近くが「あてはまらない」と回答した。「休暇は少ない」というネガティブ項目と回答数が逆転でほぼ一致していることから、養育者は「休暇が十分ではない」と感じている。養育者の家事や仕事などで時間に余裕がなく、養育者本人の自由時間が少ないことから休暇は十分ではないと感じているのではないかと考えられる。

経済的余裕について尋ねる項目は、ほかのカテゴリと比べると「どちらともいえない」という回答が最も多いカテゴリであった。その中でも「経済的な余裕がある」「たくわえは十分にある」の 2 項目に関しては、「あてはまらない」が顕著であった。また、「住んでいる家は十分な広さがある」「私たちの生活は安定している」の 2 項目は、「あてはまる」項目が顕著であった。本カテゴリについては、質問用紙の中に経済的余裕の明確な指標や基準などが設けられていなかったことから、養育者それぞれの指標や基準をはかることが困難となったと考えられる。

養育者の「レジャー・娯楽への意識」について、「週 2、3 回は家族で外食をする」「定期的に家族で

泊りがけの旅行に出かける」「生活必需品以外のショッピングをする」の全3項目で回答のほとんどが「あてはまらない」であった。子どもの実態からは、買い物や外食、旅行などは「よくする」や「ときどきする」が比較的多い項目であったのに対して、養育者の意識とあてはまらなかった。

養育者の「余暇活動への関心」について、「自分の趣味を楽しむことがある」「私にはやってみたい趣味や活動がある」「余暇は子どもと一緒に遊びたい」の3項目で「あてはまる」が多かった。中でも「自分の趣味を楽しむことがある」「私にはやってみたい趣味や活動がある」の2項目から養育者も自分の趣味や時間を持ちたい、または持っていた。一方で、「私の余暇活動は充実している」「休日は余暇活動を行うことを大事にしている」の2項目から「あてはまらない」が半数近くを占めていることから、養育者自身も頻繁に余暇活動を行うことが難しいと推察される。また、「余暇は子どもと一緒に遊びたい」は、カテゴリ内で最も「あてはまる」が多い項目であったが、「子どもと一緒に遊ぶのは難しい」の回答が「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」で割れてしまっていることから、子どもの実態や養育者の多忙感などから実現が難しいと考えられる。

養育者が子どもの余暇活動のレパートリーの拡大には、「時間的余裕」と「余暇活動への関心」が関連していると考えられる。また、養育者と子どもの実態との関連を考えたときに、子どもの知的障害の程度や養育者の余暇活動の充実さが余暇活動の選択肢にも影響を与えると考えられる。

4 余暇活動レパートリーの拡大に向けて

家庭内及び地域の余暇活動の実態と、子どもや養育者の要因との相関分析を実施した。その結果、余暇活動の実態と子どもの要因の相関は、「子どもの年齢」と「知的障害の程度」で認められた。下位概念として間接的に「コミュニケーションの要求表出方法」がレパートリーの拡大に関連することが推測された。また、養育者の「時間的余裕」と「余暇活動への関心」が、余暇活動レパートリーの拡大に関連すると考えられる。

子どもの余暇活動レパートリーの拡大には、養育

者の「時間的余裕」と養育者以外の支援者の確保が必要であり、自由記述でも確認された。

IV 結論

知的障害児の余暇活動の実態を調査した結果、余暇活動レパートリーは、余暇活動に取り組む手段を細かく分類することで、1人で行える余暇活動や養育者を伴う余暇活動に複数のレパートリーを有していることが明らかとなった。余暇活動レパートリーを拡大するには、子どもの知的障害の程度や理解力を考慮した余暇活動の提供や工夫と余暇活動を支える養育者の「時間的余裕」の確保や支援者の確保が行われることに必要だと考えられる。

文献

- 細谷一博（2011）長期休業中における知的障害児の余暇実態と保護者ニーズに関する調査研究. 発達障害支援システム学研究, 10, 11-17.
- 丸山啓史（2011）知的障害の軽い子どもの放課後・休日の実態と課題. 京都教育大学紀要, 119, 99-112.
- 武蔵博文・水内豊和（2009）知的障害者の地域参加と余暇活用に関する調査研究. 富山大学人間発達科学部紀要, 3, 55-61.
- 鈴木洸平・細谷一博（2016）知的障害児・者の余暇支援における保護者のニーズ —北海道H市を中心としたアンケートを通して—. 北海道教育大学紀要, 教育科学編, 66, 77-88.
- 武田美穂・我妻則明（2006）学校週5日制における知的障害児の余暇生活に関する調査研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 5, 163-182.
- 渡部信一・野波千代・海塚敏郎・南出好史（2000）学校週5日制における障害児の余暇利用に関する調査研究—福岡県, 熊本県の現状と問題点. 特殊教育学研究, 38, 73-82.
- 由谷るみ子・渡辺匡隆（2007）知的障害養護学校における夏季休業中の余暇支援に関する検討—保護者へのニーズ調査と余暇支援活動の事後評価から—. 特殊教育学研究, 45, 195-202.